



〈紹介及批評〉長谷川安兵衛氏著 『原價會計概論』

林, 健二

(Citation)

国民経済雑誌, 61(6):911*-913

(Issue Date)

1936-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/00055112>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055112>



保險業の經營の指針となり、斯業の改善、發展を促すところの原動力たるべきは、蓋し疑ひのないところである。

終りに臨むで、評者は博士の不退轉の學的精進に對し深く敬意を表すると共に、更に博士が勇を鼓して本書に於て觸れられざりし諸點、特に現下の我國火災保險業の直面しつゝある諸問題、即ち保險國營、保險會社の合併、震災助成金、料率協定、放火抑壓、新種保險の兼營、類似保險の取締等の問題について、その該博なる蘊蓄を傾けて更に一書を公けにし、國家に對しては保險政策の指導原理を示し、業界には、それらの諸問題に對して採るべき對策を示唆せられん事を熱望するものである。これは敢えて評者の個人的希望にあらずして、本書の讀者の全部、否我國火災保險界一般の要望なることは、評者の固く信ずるところである。

(末高 信)

長谷川安兵衛氏著

『原價會計概論』

上下二卷からなる「原價會計學」の大著に引續きこれ

紹介及批評

を縮減補正して長谷川博士は「原價會計概論」を公にされた。本書は五百頁に近く、卷末の原價會計問題集を加へて二十章からなつてゐる。

最初の六章は總論的な部分であつて、原價の意義、要素、原價計算法形態、勘定體系、帳簿組織、命令書類が總論に續いて説かれてゐるのであるが、こゝに博士の持論である、原價計算にかへて原價會計と呼ぶべき理由が冒頭に論じられてゐる。

その論によれば、原價計算といへば、それは Costing に當るもので、製造企業に於ける製品原價算出の計算方法そのものを指すと解すべく、計算されたる單位原價が必ずしも複式簿記によつて記帳される製造企業の會計帳簿の數字によつて統制されるを原則とすることを意味しない。即ち單に原價計算といふならば、それは原價決定を會計の根本たる貸借原理によつて統制すべきことを必要條件とするものではない。然るに Cost Accounting に於ては、製品原價の決定をなす上に於て、必ず會計原理に則ることを要し、従つて算出されたる原價は貸借原理

によつて記帳せられる帳簿數字によつて純制されねばならないものである。これ原價會計と原價計算との限界を形造るものである。Cost Accountingの譯語を原價計算とすることはたゞに言葉の正確さを缺くのみならず、屢々我々をして迷はしむること大なるものがあるから、これが譯語に對しては會計なる文字は絶對的に離すべからざるものと云はねばならない。故に學稱としては原價計算よりは原價會計と呼ぶことが適切であり、また Cost Accountingの譯語としても當を得ると信ずる。かくて原價會計とは營利活動（製造企業に於ては製品によつて代表せらるる）の原價を會計原理に基いて記録決定する原則を研究する科學であると定義される。

この主張は誠に味ふべきものがある。計算なる漠然たる語が誤解や偏見を惹起する懼が多いからである。且つ會計原理——主として複式簿記の貸借原理を指す——によらざる原價の如何なる計算制度も計算の正確を期し難いことは屢々説かれる所であり、Cost Accountingが General Accountingとは別のものではなく、これを含む

ものであるとは Lavence の強調する所である。原價の計算が複式簿記の機構に結合して行はれることが最も適切であることは疑ないことであるが、これは計算機構からみて云つたことである。而して複式簿記による計算機構に、直ちに會計なる語を附與するか否かは疑問であることを考へるならば、原價計算を斥けて原價會計を採ることも亦疑問と云はねばならないであらう。紹介者は原價計算なる語が原價會計よりも廣い範圍を包攝しうる爲めに前者を用ひたい。計算機構も重要な一問題であるが、その外に尙ほ多くの課題が存することを思ふからである。

一般會計と原價會計の對立——その計算機構からすれば對立ではなく、前述の如く一般會計が原價會計に包含されるもので一般會計がかへつて部分的會計となる——に關して、博士は前者を期間計算とし、後者を對象計算とする獨逸流の考方を用ひるが、理論的にはこれが兩計算を分つ根柢であつて計算機構はその後に來るものである。計算機構による豫めの限定は手順の前後を感じし

める。

第七章以下は原價要素についての詳論である。即ち原料費、勞力費、製造間接費、商的經費等が詳細に說かれるのである。この間、原料の價值計算。原料の棚卸計算も注意を引くが、とくに注目に値するのは製造間接費に關する所である。間接費論は問題を適切に細密に論破されてゐるが、製造間接費の分類として固定費變動費を挙げそこに所謂原價と操業度の問題に論及あるも、その後製造間接費豫定論、不働費論に於てこれが充分の展開を見ないのは多少物足りぬ感を受ける。投下資本利子論に於ては利子原價説。利子除外説を精しく研討し、利子除外説の根據は理論的にも實踐的にも遺憾ながら利子原價説を否定し去るには餘りにも力が弱いとて、無條件利子原價説を採られる。茲に博士の理論的徹底を見逃し得ない。最後に標準原價論及びそれに續く豫算統制論は博士が早くより深く研究された問題であつてその蘊蓄が披瀝されてゐる。

現在活潑に發展しつつある原價計算論の分野に、現状

の見透しと將來の行方とを示された本書は讀者に教ふる所の尠くないのを信するのである。

本文四九五頁。章題、一總論、二原價の意義並に要素論、三原價計算法形態論、四勘定體系、五帳簿組織論、六製造關係の命令書、七原料費論、八原料棚卸論、九勞力費論、十製造間接費本質論、十一製造間接費轉嫁の段階的進化、十二製造間接費配賦論、十三製造間接費豫定化論、十四不働費論、十五商的經費論、十六聯結並に副製品原價論、十七投下資本利子論、十八標準原價論、十九豫算統制論、二十原價會計問題集。昭和十一年六月。東京泰文社。三圓五十錢。

(林 健二)

飯田繁氏著

『最近の物價政策と景氣』

一

本書は大阪商科大學經濟研究所調查彙報第十三輯として公刊せられたので裝幀は粗末であるが、細かい組みで尙六百頁に垂んとする堂々たる大著である。著者は正當に自由主義的經濟時代に於ける景氣若くは景氣政策と世